

上淀白鳳の丘展示館と史跡

淀江地域は、米子市の最北端にあり、大山と日本海に挟まれた肥沃な平野を誇ります。この地域は先史時代から重要な人口の中心地として栄えてきました。5-6世紀の有力者の古墳があった小さな谷に、上淀廃寺が683年に建立されました。しかし、この寺は1000年頃に焼失し、その後再建されることはありませんでした。寺の基礎をなした石やその他の遺構が、1991年から1993年の間に発掘され、今では見つかった場所で保存されています。この場所は、1996年に国の史跡に指定されました。その近くには上淀白鳳の丘展示館が建てられ、この寺の本堂の祈りの空間を実物大で再現したものが展示されています。また、この寺や地域の歴史が、考古学的な調査結果や歴史記録を通して紹介されています。ここは2011年にオープンしました。

壊滅的火事で残された破片

上淀廃寺は、日本で最初の仏教寺院が建立されてから約1世紀後に建立された寺院で、奈良の法隆寺や薬師寺とほぼ同年代のもので、木造建築であった法隆寺や薬師寺は現在も残っていますが、上淀廃寺は1000年頃の大火で消失し、現在は記憶の中にしか残っていません。

考古学的な調査によると、このコンパクトな寺院群は谷間の土地をうまく利用していたことがわかります。全体的な配置は珍しいもので、3基もの複数階の塔が北から南に一直線上に並ぶ設計となっていました（一般的には1基か2基です）。しかし、火事の前に完成していたのは2基のみです。大きな本堂には祈りのために、脇の一对の菩薩像に守られる形で台座の上に阿弥陀仏像が安置されていました。これらの像の数千もの破片が発掘され、展示されています。これらの断片を元に、専門家は原寸大の復元像を作成することができ、それらは今では展示館の目玉となっています。また、多くの焦げた漆喰壁の破片も出土しました。漆喰に描かれた壁画の焦げた破片も多く発掘され、本堂の壁には元々法隆寺と同じような洗練された壁画が施されていたことがわかりました。壁画の一部も、それぞれの当初の場所で再現されています。